

# 徳富蘇峰記念館

目録 (18)

## 蘇峰とその時代展——昭和編

展示期間◇平成十三年一月五日〜十二月三十日

### はじめに

蘇峰にとつての昭和は、六十四歳から、九十五歳までの三十一年間であつた。その間、三年八カ月の大東亜戦争と多くの別れと出会いがあつた。昭和二年に弟蘆花が六十歳で亡くなり、昭和四年一月には、創立四十年を迎えた「国民新聞」社を、蘇峰は六十七歳で退社した。「近世日本国民史」をかかえて、「大阪毎日新聞」「東京日日新聞」の社賓となつた。昭和六年、清朝最後の皇帝溥儀から書簡を受け取り、昭和十年四月七日赤坂離宮で、溥儀と宮島大八と蘇峰の三人は二十分余、会談した。南次郎が取り仕切つたことは、南次郎の書簡に明らかである。昭和十一年二月二十六日には二・二六事件が起き、決起趣意書(タイプ印刷)が当時の蘇峰の日記帳に挟み込まれていた。十六年十二月八日には大東亜戦争勃発。蘇峰は十七年「日本文学報国会」、「大日本言論報国会」の会長に就任。十八年四月、三宅雪嶺と共に文化勲章を受けた。昭和二十年八月十五日、日本無条件降伏、蘇峰は玉音放送を山中湖の双宜荘で聴いた。二十年十二月二日、大日本言論報国会の会長であつたためにA級戦争犯罪容疑者に指名されたが、高齢と持病のため、自宅拘禁となつた。「毎日新聞社社賓」と「日本文学報国会会長」「大日本言論報国会会長」を辞任。文化勲章を返上した。自らの

戒名を「百敗院泡沫頑蘇居士」と誌す。二十三年十一月七日、静子夫人八十二歳で永眠。

蘇峰の晩年の十二年間は、敗戦、復興の日本であつた。昭和二十二年九月、戦犯容疑者自家拘禁を解除され、二十七年四月には公職追放が解除された。同年二十日「近世日本国民史」第百巻を完成した。同年五月には郷土熊本を歴訪、二十二年ぶりに同志社を訪問。十一月には「熊本県近代文化功労賞」を表彰された。二十八年六月、日比谷講堂に於ける「近世日本国民史完成祝賀会」に出席、約三千人が集まつた。明治二十年代から親しくしていた相馬黒光は祝賀会に出席し、聴衆の中に、青年男女の姿がほとんどなかったと蘇峰に手紙を出している。状況をはつきりと見つめて生きていた黒光の生き方を見るようである。昭和の史料はやはり書簡が中心になる。それに加え、新聞切り抜きはノートに貼りつけた状態で沢山保存されている。蘇峰独自の方法で戦況を把握しようとしていたのであろう。昭和十六年、二十年前後の書簡の一部を読んでみたが、戦時中の庶民の様子が解ると同時に、二十年八月十五日以前に、天皇の大権発動を願う手紙を蘇峰に書いている人々がいたことに、同時代書簡の重さを改めて感じた。書簡が語る声を時間をかけて今後とも聞いていきたい。蘇峰が上奏した上奏文の控えがあるが、天皇には届かなかつたようである。昭和二十年四月二十一日、鈴木貫太郎首相と会見した蘇峰は、「至尊に謁見 微忠上陳の都合 御取計有之度候事」と積極的に謁見を願つた。戦後蘇峰は敗戦の感慨を書いた「言志」の中で、「在野ノ老書生トシテ微名或ハ天閣ニ達シタルコトアランモソノ為ニ至尊ヨリ殊遇ヲ忝クシタルカ如キ幸運ニハ遂ニ未タ一面タモ見舞サルナリ」(第四巻)と書いている。

蘇峰は昭和三十三年十一月二日午後九時三十五分に逝去した。同八日、遺言により赤坂霊南坂教会において小崎道雄牧師によりキリスト教式の葬儀が行われた。蘇峰は西本願寺の法主・大谷光瑞や、鎌倉円覚寺の管長・釈宗演などと親しかつた。しかし最後には、新島先生と同じキリスト教式で旅だつた。

歌人の川田順は、

「天翔けり 終に歴史となりたまふ 噫 我々乃蘇峰先生」と詠つた。

# 一、昭和元年から昭和十六年開戦まで

## (一) 昭和四年国民新聞社退社 国民の反響

共同経営者根津嘉一郎との不和から国民新聞社を退社する。蘇峰の引退は国民的衝撃であったようで、昭和四年一月十七日付「国民新聞」に「国民新聞愛読者諸君各位」への声明文が掲載された。諸新聞の評論は百十五編を数えた。また雑誌「新聞及新聞記者」は「蘇峰翁国民引退号」（昭和四年二月新聞研究社）を出した。

巖谷 小波（一八七〇—一九三三 明治三—昭和八）東京都生まれ。

明治・大正期の小説家・童話作家。蘇峰の主宰の「文学会」に出席。博文館の「少年世界」の主筆。児童文学に貢献した。著書「こがね丸」

\*昭和四年一月十七日付

「乍早速本日新紙上にて先生御引退の訛伝あらざるを承知致、加之悲壮なる御声明書を拝誦慟然涙下を禁じかね申候。〔後略〕」

浮田 和民（一八五九—一九四五 安政六—昭和二十）熊本県生まれ。

明治・大正期の政治学者。熊本バンドの一人。同志社卒。明治十三年の「六合雜誌」創刊に参与。自由主義の主張は学生・知識人に影響を与えた。吉野作造もその一人である。

\*昭和四年一月二十五日付

「回顧すれば明治廿三年国民新聞第一号御発刊以来、洋行、旅行中の外殆んど毎朝貴台の名文を拝読し来候処、先は御広告以来、朝刊にも夕刊にも尊台の御文章を拝読不仕、御意見の異同は別問題として老生今更感慨に堪へざる次第に御坐候。〔中略〕今後は愈々国民史の完成に全力御傾注と存申上候間、その方にて猶ほ御名文拝読可仕候。」

小泉 策太郎（一八七二—一九三七 明治五—昭和十二）静岡県生まれ。

明治・大正・昭和期のジャーナリスト・政治家。日清戦争後「九州新聞」

社長となり、そのかたわら幸徳秋水ら平民社の非戦活動を支援。政友会総務として働く。

\*昭和四年一月十八日付

「昨朝寸楮呈仕候処、時に新聞を見るひまも無之、夜に入りて始めて国民新聞を去る御告文を読み候。嗚呼の二字無限の意を尽す。只悵然たるのみに御坐候。事ここに至りては何をか言わん。近日拝眉万晤可仕候。」

菊池 寛（一八八八—一九四八 明治二十一—昭和二十三）香川県生まれ。大正・昭和期の小説家・劇作家。一高同級の芥川竜之介、久米正雄らと大正五年第四次「新思潮」を創刊。一九三三年「文芸春秋」を創刊。出版事業の進展につれて創作から離れていったが、新人発掘などに功績を残した。展示書簡は、昭和四年の国民新聞退社に関しての短いものであるが、蘇峰はこの内容に深く感じ入り、昭和四年一月二十一日に開催された慰労会の席上「予は何故国民新聞を去りたるか」のなかで、菊池寛書簡を披露している。蘇峰は「この一言は私にとって五十万円の株券より有難かった」と言っている。

\*昭和四年一月十七日付

「先生今回のこと多く云ふに耐へず。ただ敢然として処決せられたるは先生の尚老いざるを示し、むしろ会心の事と存じ、先生のためにいささか意を強うするものに御座候。」

塚越 芳太郎（一八六四—一九四七 文久四—昭和二十二）群馬県生まれ。評論家。民友社社員。「家庭雜誌」の編集。湯浅治郎らと廢娼運動をすすめた。

\*昭和四年一月十八日付

「国民新聞御分手の趣御声明書拝誦致候。人生の恨事何ものかこれに過ぐべき。第一号御発刊の当初より十年程も御厄介に相成りたる身の今日に遭著して真に痛憾骨髓に徹するを覚え申候。四十余年一日の如く頂天立地、正を踏て懼れさせざりし御精神凜冽万古存し、時流の砥柱として国民の先覚として一代思潮の中流を御指導あり、家国の進運を御指揮あらせられ、〔中略〕愛山猶在らば何とか申上ぐべき。鞅鞅者存せば如何が致し可申敷。」

(二) 昭和六年九月四日付 宣統帝溥儀の蘇峰宛書簡

愛新覺羅溥儀（一九〇六—一九六七）清朝最後の皇帝（宣統帝）在位一九〇八—一二。満州国の傀儡皇帝（康德帝）在位一九三四—四五。  
〔辛未（昭和六年）九月初四日付〕

溷自辛亥蘇政隣已廿載 水深火熱民 不聊生必何如 奠安東亜極蘇民生  
鞏固邦交深望 閣下加以指導茲遣家庭教授遠山猛雄往見諸当面 □此致  
蘇峰先生閣下  
辛未九月初四日

宣統  
御筆 印

〔読み下し〕清朝が滅んだ辛亥革命から二十年たつが、民衆の生活は苦しくなっている。政治を安定させるためになんとかしなければならぬので、御指導をのぞんでいる。ここに家庭教師遠山猛雄を遣わすので、会ってほしい。

使用されている便箋は、黄色の絹本である。黄色は皇帝用の色であった。便箋サイズ28.5 cm × 19 cm。11 cm角の「宣統御筆」の朱印が押してある。蘇峰はこの書簡を九十歳の時（昭和二十七年）表装して軸仕立てとした。溥儀の手紙の前後に蘇峰は揮毫と回想を書いている。

前 「満州残夢」

後 「東亜風雲方サニ動カントスルニ際シ、天津蟄居ノ溥儀氏ハ特使ヲ日本ニ馳セ、予ニ向テ其ノ進退如何ヲ諮詢セリ 予ハ其ノ自重シテ輕挙盲動セザランコトヲ警告焉 追想恍然真如一夢。昭和廿七年十一月、三、九、十、百敗院主人」

溥儀は自伝「わが半生」上下（愛新覺羅・溥儀、小野忍、野原四郎、新島淳良、丸山昇 訳筑摩書房 一九七七年）の中で日本人の二人の人物、南次郎陸相と黒竜会の頭山満に手紙を書いたこと、それが東京裁判で波乱を起こしたと書いている。（「わが半生」上279頁）

(三) 昭和十一年二・二六事件 蹶起趣意書（全文）

蹶起趣意書

謹ンテ惟ルニ我カ神州タル所以ハ万世一神タル 天皇陛下御統帥ノ下ニ學國一体生々化育ヲ遂ケ終ニ八紘一宇ヲ完フスルノ國体ニ存ス。此ノ國體ノ尊嚴秀絶ハ天祖肇國神武建國ヨリ明治維新ヲ經テ益々体制ヲ整ヘ今ヤ方ニ萬方ニ向ツテ開顯進展ヲ遂ケベキノ秋ナリ。

然ルニ頃來遂ニ不逞兇惡ノ徒簇出シテ私心我慾ヲ恣ニシ、至尊絶体ノ尊嚴ヲ藐視シ僭上之レ働キ、万民ノ生々化育ヲ阻碍シテ塗炭ノ疾苦ニ呻吟セシメ、隨テ外侮日ヲ遂フテ激化ス。

所謂元老重臣軍閥財閥官僚政黨等ハ此ノ國体破壊ノ元兇ナリ。倫敦海軍條約並ニ教育總監更迭ニ於ケル統帥權干犯、至尊兵馬大權ノ僭窃ヲ圖リタル三月事件或ハ學匪、共匪、大逆教團等ヲ利害相結ンテ陰謀至ラサルナキ等ハ最モ著シキ事例ニシテ、其ノ滔天ノ罪惡ハ泣血憤怒眞ニ譬ヘ難キ所ナリ。中岡、佐郷屋、血盟團ノ先驅捨身五・一五事件ノ憤騰、相澤中佐ノ閃發トナル寔ニ故ナキニ非ス。而モ幾度カ頸血ヲ濺ギ來ツテ今尙些カモ懺悔反省ナク、然モ依然トシテ私權自恣ニ居ツテ苟且偷安ヲ事トセリ。露支英米トノ間一觸即發シテ祖宗遺垂ノ此ノ神州ヲ一擲破滅ニ墮ラシムルハ火ヲ睹ルヨリ明カナリ。

内外眞ニ重大危急今ニシテ國体破壊ノ不義不臣ヲ誅戮シテ稜威ヲ遮リ御維新ヲ阻止シ來レル奸賊ヲ支除スルニ非スンバ皇謨ヲ一空セン。宛カモ第一師團出動ノ大命喚發セラレ、年來御維新翼賛ヲ誓ヒ殉國捨身ノ奉公ヲ期シ來リシ帝都衛戍ノ我等同志ハ將ニ万里征途ニ上ラントシテ而モ顧ミテ内ノ亡狀ニ憂心轉々禁ズル能ハス。

君側ノ奸臣軍賊を斬除シテ彼ノ中樞ヲ粉碎スルハ我等ノ任トシテ能ク爲スベシ。臣子タリ股肱タルノ絶對道ヲ今ニシテ盡サズンバ破滅沈倫ヲ齎ヘスニ由ナシ。茲ニ同憂同志機ヲ一ニシテ蹶起シ奸賊ヲ誅滅シテ大義ヲ正シ國體ノ擁護開顯ニ肝腦ヲ竭クシ以テ神州赤子ノ微衷ヲ獻ゼントス  
皇祖皇宗ノ神靈翼ハクハ照覽冥助ヲ垂レ給ハンコトヲ。

昭和十一年二月二十六日

陸軍歩兵大尉 野中四郎 外 同志一同

事件の首謀者の一人、元陸軍大将村中孝次の起草したもので、元老・重臣・軍閥・官僚・政党を国体の破壊者とし、これら「君側の奸臣軍賊を斬除」して大義を正すのが決起の趣旨だとしている。同志に配って決起趣旨の徹底をはかった。(憲政記念館に貸出した時の「憲政記念館展」目録参照)

「決起趣意書」は蘇峰自筆の「近世日本国民史目録草稿」の日誌第三卷(昭和七年—十二年八月)に挟みこまれていた。どのような経路で蘇峰の元に来たのかはわからないが、蘇峰の所蔵であることは確かである。最近出た「図説二・二六事件」(編著 茶園義男 日本図書センター 2001・2・26)で、当館の「決起趣意書」を(徳富蘇峰蒐集)として写真版で掲載している。なぜ蒐集とかつて入れたのか、茶園氏にお訊ねしたところ、他意はなく、所蔵と蒐集の違いをすぐに解つてくださり、再販されるときには所蔵になおすことを約束した。

## 二、昭和十六年開戦から昭和二十年敗戦まで

### (一) 松岡洋右と中野正剛

松岡 洋右(一八八〇—一九四六 明治十三—昭和二十一) 山口県生まれ。大正・昭和期の政治家・外交官 日独伊三国同盟を推進 A級戦犯  
\*昭和十六年十二月十一日付(開戦三日後・全文)

「想ひ起しますが、前の世界戦争中であつた。ウキルソン大統領が例の頑固と尊大とで、我に対して誠に不合理にして横暴的態度を取つた時、時の外務次官であつた幣原君に種々柔かに米人との交渉の骨を悟したが、御存知の通りコレも頭の固ひ上に自惚の強い人で、米国に一度も行ったことのない癖に米国と米人を知つたつもり(こんな人が日本には特に多い)で、容易に私の忠告に耳を傾けなかつた。そこで私は遂に一日面を犯し声を励まして、「私も日米親善を欲する事に於て決して貴君に譲らない。之を欲すればこそ、率直に強硬に彼に當るべく、それでなければ彼は到底了解し得ないのだ(外交的辞令は率直——蛮的?——なる米人には所詮理解出来ぬ。コノ事は実行上あの故珍田伯にすらよく呑み込めなかつた)。時に

は彼の横ツ面をひつぱたきませにやなりません。

又国交といふものは唯一方の国さへよければ維持出来るものではない。双方の利益と感情を不絶願慮せねばならぬ。時には日本人にも、「ア、横ツ面をヒツパタイてやつて胸がすいた」と思はせねばならぬ。然るに貴君の遣り方を見ると、丸で日本国民の(利益は兎も角として)感情を終始無視し、唯米国の感情を和げること、少くとも之を損せぬことに汲々として居られる。こんな事をしてゐたら、終に日米国交は破綻し、干戈相見ゆるに至るべし。

日米戦争を避け、其親善を欲しながら、貴君は一步、一步、之(戦争)に近きつ、あるのだ」との趣旨を激越なる言葉を以て三十分も説いたことがあります。

然るに同一の趣旨を説いて、今日に於てすら近公始め、廟堂の諸公遂に解せず(ソコ幣原君が二十幾年前判らなかつたのは無理はないと思ひました)。小生退却後は愈々以てあの自惚と頑固な点では「ウ」氏に勝るとも劣らぬ「ル」大統領に幣原式で当つたのです。今日の結果(外交上)に終ることは当然の儀であります。自ら招いたので。相手を知り、其なやみ方の骨も知らずして、外交などとは実に片腹いたい。否国家の大災です。知らざるを知らずとなすべし。日本人には少し許りの視察なんかで知つたつもりになる馬鹿が余りにも多い。これはイギリス人に学ばねばなりません。国を誤ります。

右の言を此際なす所以は、日英米の国交処理を何時かはせにやならぬが、吾々の短所しくじりは何処にあつたのか、又現にあるのかを今から能く知つて置かねばならぬと思ふから、釈迦に説法なれど、私の知れる所を御参考の一端迄に申し上げます。

十二月十一日 朝

洋右

松岡洋右は、開戦に至つた理由として、米国人をよく理解出来なかつた日本政府の外交上の失敗を指摘し、開戦したからには、外交のしくじりを反省し、日英米の国交処理を何時かはしなければならぬ、と蘇峰に終戦工作を相談している。これは開戦三日目の時点で書いたもので、エンピツ書きである。切手がないので直接届けられたものであろう。

中野 正剛(一八八六―一九四三) 明治十九(昭和十八)福岡県生まれ。大正・昭和期の政治家・「東京朝日」記者「東方時論」主筆。蘇峰と中野正剛は二十三歳の年のひらきがあるが、中野の人なつこい性格は齡をこえて友情深いものになった。「国民は先生の態度を注目している」と蘇峰の責任ある社会的地位の重要性を指摘している。

\*昭和十七年二月(推定) (大政翼賛選挙についての所感・全文)

「拜啓 政府内の官僚ブロックと、政界のルンペンとにより策謀せられたる例の推薦母体は、誠に言語同断の存在にて、それが政事結社となりて、官製選挙をなすなど、国民を愚弄するの甚しきものと存候。本質的に見れば英米依存体制の強化策動なり。これが一歩前進すれば、大東亜戦争を裏切るやうな空気を醸成すべく、前途深憂に勝へず候。従て名士の名を聯ねて暗取引にて、醜陋なる術策を弄せんとするもの也。先生は斯の如き変てこなる政事結社などに煩はされざる様、即刻御辞任ありて然るべしと存候。一日席に聯ならるれば、一日彼等の為に利用さる、こととなるべし。国民は先生の御態度に注目致居候。不盡

徳富先生 侍史

中野正剛

## (二) 鹿子木員信と小泉信三

鹿子木 員信(一八八四―一九四九) 明治十七(昭和二十四)東京生まれ。明治・大正・昭和期の哲学者。慶応義塾教授となり、のちヨーロッパ留学。九州大学教授。昭和二年ベルリン大学客員教授として日本学講座を担当。ナチス・ドイツに招かれ、「皇学」を講じる。日中戦争初期は現地で思想工作に従事。大日本言論報国会理事。

\*昭和十九年五月十五日付 封書 便箋四枚 東京都京橋区銀座四ノ一(銀座三越六階) 社団法人 大日本言論報国会の封筒使用

〔前略〕但だ戦局の悪化に加ふるに敵の空襲等により実害を蒙り候が如き時節到来致し候は、その時こそ極度の警戒を必要と致すべくと愚考致存候。昨日、東都日比谷公会堂において国民総決起大会中央総会開催せられ、小生も参列仕り候処、東條首相の演説は真摯熱烈闘志満々たるものあるを感じしめ甚だ意を強ふ致し候へ共、その閣僚と翼賛・翼政の指導者の

顔触を演壇上に見て、その側近、幕僚、協力者に、殆んど一人の眞の同志を擁せざる東條首相に対し、寧ろ同憐の念、禁じ得ざるものあるを痛感仕候。東條首相に人を見、その志を知るの明あらんには、これこそ鬼に金棒と存候に、此の人にして此の欠陥あり。痛恨に堪へず候。」

小泉 信三(一八八八―一九六六) 明治二十一(昭和四十一)東京生まれ。昭和期の経済学者・教育家。慶応義塾教授・塾長。経済学史・社会思想史を講義。長期にわたる慶大塾長として大きな社会的影響力をもった。  
\*昭和十九年五月三十日付(全文)

「拜啓 筆硯愈々御多様の段、慶賀の至りに奉<sub>レ</sub>存候。陳者、過般雜誌『言論報国』本年三月号御掲載の「蘇翁漫談」拜読致候処、其末段、福沢諭吉先生に対する御評論中に、乍遺憾御承服申上兼候而三ヶ条有<sub>レ</sub>之候に付き、甚だ失礼とは存候へども、之に対する所感、また其根拠たるべき数項の文献的事実を書き綴り、当塾学生新聞に発表、別便を以て一部敬呈仕候間、何卒、御寸暇を以て御一読被<sub>レ</sub>下候はば、仕合の至りに奉<sub>レ</sub>存候。

猶ほ右拙文は同じ『言論報国』誌上に掲載するを適當と存じ、一度び其旨申入れ候へども、同誌編輯部に於て、差支ある旨過日鹿子木博士より回答有<sub>レ</sub>之候に付き之を見合せ、右の如く三田新聞に寄稿致候段、何卒御諒承被<sub>レ</sub>下度候。

尚ほ此事に關聯し、決戦々局に於ける言論報国会の任務に關し、一會員として多少の所感有<sub>レ</sub>之、鹿子木博士まで遠慮なく申述置候に付き、或は機會を得て同博士より御伝言申上ることも可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之やと存申候。右要用のみ申述度、斯の如くに御座候。敬具

昭和十九年五月三十日

徳富猪一郎様

東京都芝区三田 慶応義塾 小泉信三

蘇峰への書簡が、一通しかなくても、読む人の心に問題を提起し、真相を調べてみたくなるような書簡がある。昭和十九年五月三十日、三田慶応義塾から、熱海市伊豆山の徳富蘇峰に送られた小泉信三の手紙は正にそれである。この書簡と同日付で小泉自身が誤字を七箇所訂正した五月

十日付の「三田新聞」が送られている。それには小泉信三の「徳富蘇峰氏の福沢先生評論に就いて—先生の国権論其他」が掲載されている。小泉に駁論を決議させるほど、憤慨させた「蘇翁漫談」は社団法人大本言論報国会が発行していた雑誌「言論報国」（昭和十九年三月号）に掲載されたもので、昭和十八年十二月二十五日、大日本言論報国会発足一周年の理事会席上での蘇峰の話を活字にしたものである。

昭和十九年といえ、戦争時下、蘇峰は大きな影響力を持った言論人であった。小泉が蘇峰に反駁の筆を執った背景には、軍部の政治的支配が強くなり、どこからともなく福沢攻撃論が流布された（昆野和七「福沢研究」第九）のためとある。小泉は自分の蘇峰への反論が、「徳富氏の文の読者に多少異なる判断の資料を供し得れば幸ひと思ひそれを希ふものです。ただ私は人に私見を強ひず、文献の事実によつて事実を語らせたいと思ふものであります」と時代の権力に迎合せず、己の信ずる所を述べ、敢然と立ち向っている勇氣ある姿を示している。この姿こそ、今から九十年前、福沢の勝海舟批判に反駁した若き蘇峰を思い起こさせるものである。この一通の書簡にまつわる背景を調べることによつて、勝海舟・福沢諭吉・小泉信三・徳富蘇峰の生き方を学ぶことができる手紙である。

### (三) 新聞人の抵抗

#### 東条英機への蘇峰書簡

東条 英機（一八八四—一九四八 明治十七—昭和二十三）東京生まれ。昭和期の陸軍軍人・政治家・翼賛政治体制をひく。内閣総理大臣。極東国際軍事裁判において、最高の戦争責任を問われ絞首刑。

\*昭和十八年三月十六日付

「前略」若シ朝夕ノ新聞ヲシテ眇乎タル二頁帑タラシメンカ、世間ノ所謂広告散ラシノ類ニ過ギズ。陸海勇士ノ奮闘ノ記事モ、銃後老若男女ノ忠良報國ノ美談モ、殆ンド総テ抹殺セザルヲ得ザルベシ。矧ンヤ世界ノ視聽ヲ聳動スルガ如キ大論文ニ於テオヤ。「中略」新聞紙ノ利器タルハ軍國多事ノ今日、尤モ然リトス。平時ニ於テハ尚忍ブ可シ。今日ニ於テハ即今以

下ニ紙幅ヲ減削スルハ、百害アリテ一利ナシ。新聞紙ハ情報局ノ延長ニシテ、又其ノ補充ナリ。而シテ其ノ社会ノ各層ニ浸透シ、内外ニ蔓延スルノ動力ハ到底何物モ之ニ追隨スル難シトナス。「中略」若シ今日新聞紙ノ軍國ノ御用ニ立ツコト小ナリトセバ、是レ寧口指導者其人ヲ得ザルノ罪ニシテ、決シテ新聞紙其者ノ罪ニアラズ。若シ当局ノ有司ニシテ之ヲ善用スルノ道ヲ解セバ、其ノ効用ハ今日ニ倍シ乃至十倍スルモノアラン。日露戦争当時ヲ回顧セバ、思半バニ過グルモノアラン。老生ノ草莽ノ老書生、新聞経営ニ就テハ一切没交渉ナリ。但ダ天下ノ為メニ敢テ閣下ノ尊嚴ヲ冒流シテ遍々ノ丹忱ヲ効ス。

昭和十八年三月十六日

徳富猪一郎

緒方 竹虎（一八八八—一九五六 明治二十一—昭和三十一）山形県生まれ。昭和期の政治家。朝日新聞社に入社し、編集局長、取締役。鈴木内閣顧問、第四次吉田内閣官房長官。自由党総裁。自民党総裁と目されていたが急逝。

\*昭和十九年七月五日付（全文）

「拜啓 先週土曜日、正力氏と会見 月曜日田中新聞会長と会見 昨火曜新聞会に田中 正力 高石 大野諸氏の参集を請ひ 御高論を披露して蹶起を促し候処 皆々趣旨に於ては、大賛成 先づ手始めに東条内閣の注文引受所たる阿部大将と会見 言論人としての忌憚なき意見を披瀝することとに決し 明六日大将を訪問する段取と迄相成候。先生の謂ゆる「虎髯を捋ぐる」感無きに非ずも 手始めとしては此辺かとも考へ候。其際高石氏より先生玉稿に関し 当局と折衝の経過を聴取 高石氏に乞ふてゲラ刷をも拝見仕候処 実に近來の热门文章にて 今日吾々言論人の意衷を尽して一字の加ふるもの無御坐候。何故にこれを紙上に掲載せしめざりしか 端的にこれが時局を今日に致したる所以 生死岩頭に立ちながら 人心の燃え立たざる所以 言論の黙止を許さざる所以と存候 阿部大将と会谈の結果如何によりては、老先生の御出慮を請はざるを得ざる事あるやも知れず予め御合置奉願候 軍官民共に尊陛下の赤子たるに於て 寸分の差違なし然るを日支事変も、大東亜戦争も、銃後の事も、軍官のみにて、民を無視し、而も軍々官々ばらばらに小是非 小分別に日を暮したる結果が今日の為体

にて、痛憤此事に御坐候 阿部大将と会見後 間を見て拜訪 親しく御高教を仰ぎ度 為邦家一層御加餐万祈候」

馬場 恒吾（一八七五―一九五六 明治八、昭和三十一）岡山県生まれ。大正・昭和期のジャーナリスト・政治家。「Japan Times」に入社。その後渡米。帰国後、徳富蘇峰主幹の国民新聞社編集局長などつとめ、その間パリ講話会議特派員。退社後は社会大衆党顧問として普選・無産運動に参加。新聞・雑誌にリベラルな論陣をはる。正力松太郎公職追放の後をうけて読売新聞社社長就任。

\*昭和二十年十一月七日付（長野より）

「戦争終結後社会情勢変転極り無く先生の御健在を祈る為切なるもの有之候。先頃御手紙に封入されたる額字小生珍宝として保存可致。厚く御礼申上候。又そのお手紙には先生が米軍により調べられるかの御懸念あるかの如く拝読され候が其後の様子をみれば所謂戦争犯罪人とは戦時国際法規を破つた者を指すらしく、先生などに関係無しと存じ候。且言論人を問題にするなどは言論自由の趣旨に反するものとして充分抗弁の余地有るものと思われ候。それよりは今後の日本の運命に関して私共は非常に憂鬱の感に襲われ居り候。昨今の模様にては日本は或は共産党の為に破滅されるにはあらずやとさへ思はれ候。食糧欠乏から絶望的になりたる国民を騙つてどんな事を仕出来かすか、それを警戒抑制すべき新聞が自ら下剋上の運動を起し、自暴自棄的の傾向を助長する観すら有之。小生すら心配に堪へざる形勢を訓誡いたし居り候。今日程先生の御意見を伺度思ひし事無之候。まだ山中湖に御滞在かと存じ此書面差出し候が御地は最早余程寒からんと存じ候はば信州は最早相当に寒く殊に食糧事情も先頃の出水の為逼迫し小生は今月中には引揚げる積りに候。〔後略〕

正力 松太郎（一八八五―一九六九 明治十八、昭和四十四）富山県生まれ。昭和期の政治家・実業家。内務省に入り、敏腕な警察官僚として活躍。後藤新平の世話で読売新聞社社長に就任。日本テレビ放送を設立、社長に就任。

\*昭和二十年九月五日（築地本願寺より山中湖へ）

「先生、御親書有難う御座ります。時局に就きましては無念の二字の外申上ぐる言葉もありません。只だ今更ながら軍畧々政治との一致せざりしこと軍官共々指導者に実力を欠きしことは残念であります。次に弊社も八月十五日正午以来御茶の水の地下工事を中止しました。目下読売別館（旧報知社屋）と本館の復旧に毎日百名余の鉄工、大工、人夫が働いております。本月十五日二別館二移転し、編輯局、業務局、工務局の事務を執りまして。同社屋は幸二地下及一階、二階が焼失せるも三階四階五階が無事でありましたので、地下室、一階、二階の復旧と共に三階以上の貸室の人々二明渡しを受け之を使用することに、致したのであります。輪転機は十七台を焼失しましたが、幸二も一生懸命の努力にて本月末二少くも四台の高速度輪転機を読売本館の工場二於て運転開始の運び二至るかと思ひます。何卒御安心ください。〔後略〕

山本 実彦（一八八五―一九五二 明治十八、昭和二十七年）鹿児島県生まれ。大正・昭和期の出版事業家・政治家。東京毎日新聞社社長をへて、大正八年、改造社をおこし、総合雑誌「改造」創刊。「中央公論」と並んで自由主義・社会主義の世論を率いた。

\*昭和十九年七月十三日付（品川区上大崎から山中湖畔・全文）

「謹啓 甚大なる御後援を毎々戴いて居ますのに、私の不徳は今度改造社を全部大波に浚はしてしまわれました。今は全く私等の役割が尽き果てたのだと思ひ去つて、田園に赴く以外なしと思つてゐます。而し又、皇国の迫れる急に想致するとき、それが許されるものかと考え直して逡巡してゐます。ここ暫く黙想して善後のことを考慮して見たく思つてゐます。巨いなるそして長きに亘る御配慮を感謝九拝致してゐます。 敬具」

#### (四) 敗戦直前

徳富 蘇峰（一八六三—一九五七） 文久三、昭和三十二、熊本県生まれ。

##### 上奏原稿

征戦三年將兵庶民今日ノ危急ニ到ル。是レ皇国史上未曾有ノ大変。今其ノ由来ヲ原ヌルコトハ姑ラク置キ此ノ打開ノ方策ハ一ニ陛下ノ明治天皇辰ノ皇讓ニ則リ天下ニ向テ更始一新ノ大号令ヲ發シ玉フニアリ。

大権ノ發動ニヨリテ旧来ノ諸制度ヲ中止シ或ハ全廢シ太政官ヲ設ケ陛下御親政ノ下ニ万機親裁皇軍親征英ヲ中外ニ示シ玉フニアリ。

臣等陛下ノ聖意ヲ知ル。我モ此上更ニ陛下ニ此ノ如キコトヲ請願スルハ寔ニ故元田永孚ガ孤忠ヲ明治天皇ニ獻ケ奉リタル心事ト同一ナリ。

人或ハ皇室ノ政治ニ御干係アルヲ以テ累ヲ皇室ニ及スト云フ。然モ此ノ国土ハ皆陛下ノ高祖高宗以來無窮ニ把持シ玉フモノナリ。此ノ一億ノ臣民ハ陛下ノ臣民ナリ。而シテ其ノ中枢□子タルモノハ歴世忠良ノ臣民ナリ。而シテ天皇ノ神聖ニシテ犯スヘカラサルハ憲法ニ明記スルノミナラス鑿國以來不磨ノ典則ナリ。

臣等尚進言セントスル□甚タ多シ然モ先ツ其ノ大綱ヲ挙グレハ其目自カラ張ラン是レ粗枝大葉ニ止ル所以ナリ。陛下幸ニ微臣等ノ孤忠ヲ諒シ速ニ驚天動地ノ聖断ヲ下シ給ハンコトヲ臣等恐懼懇求ノ至リニ堪ヘス。

昭和二十年二月 言論報国会長 徳富猪一郎

##### 鈴木貫太郎首相への意見書

鈴木 貫太郎（一八六七—一九四八） 慶応三、昭和二十三、千葉県生まれ。関宿藩代官鈴木由哲の長男。日清・日露戦争に従軍。昭和四年、侍従長兼枢密顧問となる。在任中は忠実な天皇側近としての姿勢を示した。

二・二六事件で襲撃され重傷を負い、侍従長を辞職。昭和二十年、宮中勢力から、その政治的野心のなさを買われて組閣。終戦詔勅放送直後、総辞職。

「鈴木首相閣下ニ与フルノ書」昭和二十年七月十六日

「鈴木首相閣下」

日々御尽瘁眞ニ感佩ニ勝ヘス。迂生モ年齢ニ於テハ閣下ニ一日ノ長アリ

仍チ老人ノ心理状態ハ聊カ能ク之ヲ知ル。閣下ニ対スル同情ノ深厚ナルハ当然ニ候。天下ノ大勢風ニ乎弊船ニ坐シテ大瀑布ヲ下ラントスルニ似タリ。之ヲ救済スルノ道只一。天ノ岩戸ヲ押シ開ラキ至尊御出現一君万民ノ実ヲ御□□アラセラルルコト是レノミ。今ヤ日本國ノ病ハ骨髓ニアリ。若シ今日ノ様ヲ語テハ独乙ノ覆轍ヲ履ムモ未ダ知ルベカラス。迂生ハ決シテ危言激語以テ閣下ヲ諷刺聳動カントスルニアラズ。惟フニ世上ノ嘉言善行美事快業所謂光明ノ半面ハ閣下ノ熟知スルトコロ迂生ノ啞々□タサレドソノ半面ハ奈何迂生ハ独自ヲ慙愧ニ禁ヘス。國家危急存亡ノ刹那ニ際シ情氣滿々ニ敗戦思想ハ社会ノ公私上中下ノ各務ニ渗透充実ス。閣下若シ彼等ガ仮面ヲ脱シソノ本音ヲ吐リテ聞カンニハ愕然自失スルモアラシ。今ヤ國民義勇隊ナド出来セントスルモコノ俣ナラハ若干ノ除外例ハアリトスルモ恐ラクハ烏合ノ衆ナランノミ。今真ニ國民ヲ覺醒シ國民ヲ蘇生シ國民ヲ清新活發護國ノ勇氣凜烈ニシタラシムルノ道ハ至尊自ラ大号令ヲ渙發シ玉フノ一アルノミ。如何ニ閣下ガ千言万語シテモ今日ノ官吏ハ閣下ノ思フ様ニハ動カズ 官吏尚然リ況ンヤ國民ヲヤ。

政府ノ信ヲ國民ニ失フヤ決シテ一日ニアラズ。政府ト云ヘバ文武ヲ合シテ同様ナリ。特ニ昨今配給一割減ノ如キ前農相之ヲ保証後農相之ヲ覆ノス惰眠ノ間掌ヲ反ヘスカ如シ。天王山ノ文句モ亦同様ナリ惟フニ何人カ政府ニ立ツモ到底此ノ國民ノ心ヲ新タニシコノ國民ノ心ヲ一ニスルコトハ至難ナラン然モ天日一照乾坤屯ニ光輝ヲ生ス多言ヲ埃タザルナリ。迂生ハ元來対米英戦争ノ熱心ナル主張者タル程ノ力ナキモノノ賛成者ニ相違ナシ。自ラ責任ヲ感スル 重且緊若シ独乙ノ覆轍ヲ履ムカ如キアラバ万死余罪アリ故ニ身草沢ニ存ルモ其ノ深憂遠慮ハ決シテ台閣下ノ諸公ニ譲ラズ是ヲ以テ叨リニ僭越ヲ願ミズ誨ヲ閣下ノ左右ニ請フ区々ノ微衷御亮察アラバ幸甚

昭和二十年七月十六 徳富猪一郎

##### 猿田 みね子

終戦を六カ月後に控えた時期に蘇峰へ宛てた一女性からの書簡。

\*昭和二十年二月二十日付  
先生の御高話を身のまもりと有難拝聴致し居り候ものにて大権発動の急務派して繰返しく申し候 御病中如何と心を痛めおり候。



(五) 敗戦直前の宣伝ビラ

終戦直前直後に投下された宣伝ビラ合戦を示す十八枚のビラを展示する。これらのビラには日本側と米国側があり、日本側には徹底交戦を主張する組と戦争を止めようとする二種類があった。米国側は「日本の皆様」「日本軍部指導者諸君」「日本国民諸君」と呼びかけたもので、アメリカ合衆国大統領ハリリー・エース・トルーマンより一書を呈すと、トルーマンの写真入りである。日本側のもは、「日本国民は欲望の自由、恐怖からの自由、言論の自由、圧制からの自由を欲し、この自由を得る道は唯一つこの戦争を惹起した軍閥を除去することだ」としている。紙質の悪さが当時の窮地をしるばせるものである。

宣伝ビラ

国民諸子ニ告グ  
皇軍無クシテ皇国護持  
全ウスベカラズ  
皇軍敵トシテ此處ニアリ  
国民諸君  
重臣ノ世迷言ニ迷ハサルノコトナリ  
我等ト共ニ戦ヘ  
コレコン真ノ忠義ニシテ  
コレノミ必勝ノ道ナリ  
帝国海軍航空隊司令

戦ヘル、マダイクラデモ戦ヘル  
今マデノ戦争ニ国民ハ本當ノ  
カヲダシテハキナイ  
今マデノ戦争ハ、大將ヤ大臣ヤ  
役人ノ戦争ダ  
コレカラガ本當ノ国民ノ戦争ダ  
三千年來、コリニコツタ忠誠ガナンデ  
あめりかナドニ負ケルモノカ  
特攻隊ノ人達ヲムダ死ニサセルナ  
降伏ナンカ出来ルカ

No.2034



軍閥が去れば國運も本振るべし  
此の物語は、昭和十一年に於て  
一、上野、五月九日  
一、成金は、本島四島  
支那軍に捕虜に成り、二年、  
は十四で元の物語へした。  
一、上野、五月九日  
一、成金は、本島四島  
支那軍に捕虜に成り、二年、  
は十四で元の物語へした。  
一、上野、五月九日  
一、成金は、本島四島  
支那軍に捕虜に成り、二年、  
は十四で元の物語へした。

(ウラ)

(表)

No.2081



日本の偉人、歴史に輝く  
日本は自由の何たるかを理解した人々に依つて強大を致した  
のである。  
「國家の立はその國民の獨立より」と唱へし大思想家吉野  
その著書「思想と人格」に於て自由の定義を下した深作安文  
博士。  
多年議會政治の闘士として命令を聽せし尾崎行雄氏  
刺客に襲はれた時「板垣死すと自由は死せず」と絶叫した  
板垣退助氏。  
此の人達によつて昔の日本には「自由の國家のみがその強大  
を致し得る」と云ふ事實がよく理解されて居た。



昭和十一年に尾崎行雄氏が「世界の趨勢に逆行し軍國主義の舊弊を固守し恰もそれが國に最も忠なる所以であるが如く考へては決して國に忠でもなく又自らを愛する所以でもない」と叫び得たのが恐ろしく最後であらう。軍閥が日本の發言の自由を拘束し、荒木の如き人間が日本の軍事的敗北に導いたのである。現在の事態は、日本を破滅に導いた軍部指導者連の採つた理論が誤譯であつて、尾崎氏の如き人々が正當であつた事を立派に證明して居る。言論の自由と自由主義政府とを再び確立することが、日本の將來を保證し得る唯一の道である。

(ウラ)

(表)

No.2090



日本軍部指導者諸君  
諸君は、日本の國土、海城及び上空を防衛し得ると  
日本國民を信服させる事が出来るだらうか。  
皇軍の質問は、ハリリー・エース・トルーマン米大統領の日本國民宛  
勅告に於て發せられた。諸君は曾て、東京への最後の降参たるダ  
ム・テニアン・比島、硫黄島・沖縄を防衛すると断言したは  
ないか。米機をして断じて日本上空を飛せしめなかつたか。  
米機ではなかつたか。諸君は果してこの約束を履行し得たか。  
米國はこの戦争を最後まで戦ひ決意であり、勝利を達成する  
に要する多大なる困難を絶大な犠牲を厭ふ者の存在しない事を  
茲に反復確言するものである。  
諸君の將來は君自身自身の手に在り、諸君は多くの兵を無駄で餓  
い死に投じるか、或は又名譽ある平和を探るか、その孰れかを選  
び得るのである。

(ウラ)

(表)



表は、東条以下11名の軍人の顔写真  
裏は、トルーマン大統領の顔写真

### 三、昭和二十年敗戦以後

蘇峰は敗戦後A級戦犯容疑者に指名され、多くの国民・知識人に戦争責任者として批判された。それまでの新聞人・言論人としての功績も否定された。文章報国を自らの使命として明治・大正・昭和を生きてきた蘇峰にとってまさに「一大墜落」の時であった。

しかし追放状態にあっても、日本の将来への提言を後輩達に書簡で送り続けていた。

#### (一) 敗戦直後の蘇峰の気持ち

「忠憤衝天」昭和二十年九月十三日

昭和乙酉九月十三於岳麓双宜莊 頑蘇逸民

言者有罪 聽者不足為誠 無用之閑文字 可深秘焉 頑蘇誌

言問はむ 国を賣利たる大臣等は 猶此上仁賣留物阿理や  
赤毛来る 猶太茂来礼波黒毛来流 青きは独季民艸能色  
昨日摩天 東亞乃盟主日本 呂宗 布哇能仲間入須流  
昨日また モンペー付けた乙女等波 スカート蹴利天サンキューと呼  
舞

天照ら斯 神乃日嗣能天皇波 醜夷二降伏登宣ひ玉いぬ  
味気なや 嗚呼味気なや味気なや 独り眺むる大空能不二  
何事茂 変利果たる世の中に 昔ながらの富士能神山  
昨日まで 日本主義乃鼓吹者は 世界文化の先達登奈留  
今更に何を語ら舞吾かこころ 知るや知らすや 不知火の友  
薇蕨以る 野辺も山辺茂荒礼に計理 霞越吸ふ天 生く由しも加奈  
以上非短歌 非俳謡 文字粗笨 詞句唐突 真是艸笨 逸民乃衝口  
而発者也 偶録似 静峰賢友 賢友深秘百年之後 世或有解之者云尔

頑蘇又識

#### (二) 日本の将来への提言

鳩山 一郎（二八八三〜一九五九 明治十八〜昭和三十四）東京生まれ。大正・昭和期の政治家。鳩山和夫の長男。政友会に属したが、敗戦後自由党結成に参加し、初代総裁となる。

※昭和二十年十月十七日付（全文）

「拝復 十月十四日付の御尊墨只今拝誦仕候 東京は言論自由をはき違ひ 共産党の無軌道の演説は遺憾至極に御座候 吾々が天皇制維持に命を抛げ出すこと 勿論に御座候 御安意被成下度奉願候 松野君一昨夜九州に出発致候 帰京後に回覧に可供 又安藤君には明日可示候 止むに止まらず新党結成に努力中の小生共々 御声援の程切に奉希候 十月十七日 鳩山一郎 蘇峰先生」

「鳩山一郎氏へ与へたる意見書」（昭和二十七年十一月十二日葦山水宝館に鳩山一郎氏を訪問に付手贈管見教則控）

#### 管見教則

「占領七個年間に米習払拭ノ事

日本人ノ自覚ヲ取り戻ス事

皇室ニ対スル觀念ヲ正確ニスル事

君主教育ノ事 拱手傍觀ハ決シテ立憲君主ノ天職ヲ尽ス所以ニアラサ

ル事

英国ノ実例ノ事

倫理道義ノ觀念ヲ適正ノ点ニ指導スル事

奉仕ノ精神ヲ普及セシムル事

教育者ヲ教育スル事

今日ノ教育ハ小中大一切ノ段階渾テ共産主義ノ温床タル事

政府法度ノ威信ヲ恢復スル事

今日ハ下剋上ノ全滅時代ナリ 社会ノ秩序国家ノ治安ハ累卵ノ危ニ在

リ 此ノ現状ヲ一変スルニハ非常ノ雄断ヲ要スル事

今日ノ憂ハ中流階級ノ全滅ニアリ 如何ニシテ中流階級ヲ護持スヘキ

カハ邦家百年ノ大計タル事

農地改革ハ中地主ヲ作ルヨリモ寧ロ一掃シ去ルノ用ヲナセリ 中流小  
商工業者モ即今全滅ニ瀕シツツアリ ヤカテハ日本モ亦労働貴族ノ発  
生ヲ見ルニ到ラントスル事

民主々義ニ宗教ノ裏附ナキトキハ世間ハ全ク修羅場トナル 今日ノ日  
本ニモ其ノ徵候ナキニシモアラス 実ニ寒心ニ勝ヘサル事  
政治家ノ品性素質追々ト墮落シツツアル事

対外政策ニ就テハ其ノ大綱ヲ民主国ト提携同調ニ定メ一切ノ作用ニ付  
テハ自主的ナルヘキ事  
対亜細亞諸民族間トノ親和妥協ニ付テハ格段ノ注意ヲ払イ手段ヲ講ス  
ヘキ事

言論界ハ今日全ク左傾セリ 此ノ方面ニ対シテハ世道人心ニ心アルモ  
ノハ尤モ矯正スルノ必要ヲ感スル事

箱口弾圧ハ愚策ナリ 風ノ神ヨリモ太陽ノ神ノ作用可ナル事  
民主主義ノ模倣ハ家庭内ニモ侵入シ家庭内ノ秩序ヲ維持スルサヘモ困  
難ヲ来タサントスルノ傾向アリ 是レ皮相的米国产化ノ賜ナリ 民主化  
ト米国产化トヲ同一視シタル弊ナリ 我等カ米習一掃ヲ必要スルハ当然  
ノ事 昭和廿七年十一月十一日 蘇峰九十聖

中曽根 康弘(一九一八、大正五<sup>七</sup>) 群馬県生まれ。

戦後の政治家。自民党結成後、党総務会長など就任。河野派幹部であった  
が、河野一郎没後、中曽根派を作る。昭和五十七年、首相となる。

※昭和三十一年一月二十八日付

先生益々御健勝のこととお喜び申上ます

先日お邪魔の折り 書籍をとりに行かれた先生の足腰の健強なるを拜し  
大いに意を強くいたしました。

憲法改正に関し御激励を賜り感激に耐えませぬ

憲法は次の時代に生きる今日の青年自ら創るべきもの 老人は後見人と

して助言すべきものと考へ小生等の努力足らざるを恥ぢ入る次第でありま  
す 小生本日共立講堂で創憲の演説を行ひ 以降全国に与論形成の遊説行  
を行う予定であります

### 当館所蔵 昭和元年から敗戦までの総理大臣の書簡

総理大臣就任順	氏名	生没年	出身県	所蔵数
25代・28代	若槻 礼次郎	1866-1949	島根	4
26代	田中 義一	1864-1929	山口	7
27代	浜口 雄幸	1870-1931	高知	1
29代	犬養 毅	1855-1932	岡山	6
30代	斎藤 実	1858-1936	岩手	7
31代	岡田 啓介	1868-1952	福井	2
32代	広田 弘毅	1878-1948	福岡	2
33代	林 銑十郎	1876-1943	石川	10
34代・38代・39代	近衛 文麿	1891-1945	東京	23
35代	平沼 騏一郎	1867-1952	岡山	1
36代	阿部 信行	1875-1953	石川	7
37代	米内 光政	1880-1948	岩手	3
40代	東条 英機	1884-1948	東京	20
41代	小磯 国昭	1880-1950	山形	6
42代	鈴木 貫太郎	1867-1948	大阪	1

## 四、文化人からの手紙

大橋 新太郎（一八六三—一九四四 文久三、昭和十九）新潟県生まれ。

明治・大正・昭和初期の実業家。父大橋佐平と「越佐毎日新聞」を發刊。明治十九年上京し「博文館」を設立。「日本大家論集」「日本之商人」などを次々に發行。実業界でも活躍し、大日本麦酒、日本硝子など七十数社に關係した。蘇峰の主幸した「文学会」の参加者で小説家の大橋乙羽は、佐平の長女と結婚し「博文館」の経営に参加した。昭和十七年の書簡からは、蘇峰と新太郎を巡る奇縁に感銘を受けた様子が伝わってくる。また、この書簡から文久三年生まれの会「文三會」が存在し、昭和四年に集まりがあった（蘇峰は欠席）ということがわかった。文三會の面々は、田中義一（政治家）、添田寿一（財政経済学者）、太田清蔵（実業家・政治家）、八木逸郎、町田忠治（政治家・実業家）、阪谷芳郎（政治家）、坂田貞・藤山雷太（実業家）らであった。昭和四年といえは蘇峰にとっては「国民新聞」を退社するという激動の年でもあり、人との縁を大切に蘇峰がこの文三會に出席しなかったのも理解できる。書簡には、その文三會に集まった人々の多くが既に亡くなったが、蘇峰の衰えぬ活躍振りを喜ぶ新太郎の気持ちが込められている。

\* 昭和十七年二月二十七日付

〔大意〕尊者川上大将を取り寄せ読ませていただいた。故石黒子爵の依頼で、お書きになったとのこと、実は川上大将亡き後の川上郎を小生が譲り受けたのも石黒子爵の勧めであったので、とても感慨深いものがある。また尊台が社賓として御活躍の日日新聞社は、以前加藤高明より小生に経営を懇望されたが、新聞経営に意向が無くお断りした事等も思い出され、尊台との奇縁に感懐一入である。たまたま昭和四年の文三會に於ける写真が出てきて、當時を思いだし懐かしかった。あの会に出席した文三生まれは田中義一、阪谷芳郎、藤山雷太、坂田貞、太田清蔵、田村麻吉、添田寿一、町田忠治、八木逸郎、小生などであるが、未だに健在なのは町田君小生などくらいで、その多くは既にこの世にいない。尊台のご活躍・ご健筆は誠にうれしい限りである。

野村 吉三郎（一八七七—一九六四 明治十、昭和二十九）和歌山県生まれ。大正・昭和期の海軍軍人。第一次世界大戦中はアメリカ大使館付武官としてルーズベルトと親交を結んだ。昭和十二年四月から学習院長に就任。昭和十六年二月より駐米大使を務め、太平洋戦争開戦直前までハル國務長官との日米交渉にあたった。書簡は学習院長として蘇峰に宛てたもの。

\* 昭和十二年八月二十四日付

〔大意〕昨日夕刊の「国民をして嚮ふ所知らしめよ」を読み感服した。日清・日露戦役をいろいろの立場から経験された結果の金言と思う。経験有る優秀な航海士は、充分に天候を予測し、万全の準備をして風浪の猛威を克服するが、初心者は、油断し波浪に翻弄され、空前の被害を蒙る。国という船をあやつる航海士は決して神頼みではない。先生が国民の驕慢を戒められるのは結構なことで、私も御教訓には同感。現在教育に従事しているが先生の「日々だより」は誠に貴重な御意見と思う。心から感謝しご健闘を祈る。

東条 勝子（一八九〇—一九八二 明治二十三、昭和五十七）東条英機夫人。日本女子大卒。蘇峰は東条亡き後、時々勝子夫人にお小遣いを渡していたという。書簡からは、軍人の妻としての覚悟が伝わってくる。

\* 昭和二十一年四月二十一日付

本年はむつかしいことのみで鶯の音の侘しさを初めて味わった。あるじあのように成り、先生ご身辺案じている。大石様から大かたの様子承知した。奥様にはお心づかい、重々お察しする。東条はすでに生きのびすぎし只今にて、覚悟しているが、一人かたでもご無事にとそれのみ祈っている。深山で一部落四軒のみの静かな処で土にたししみつつ、あるじの苦を偲び、遺家族の方々や戦災者のご苦難をしのびて、せめてもと最低度の生活の中に精一杯働いている。東条力たらず、かく成り皆様にご迷惑おかけしいつも申しわけなく存じている。

深井 英五（一八七二—一九四五 明治四、昭和二十）群馬県生まれ。

大正・昭和期の財界人・官僚。国民新聞社、民友社に勤務。明治二十九、三十年にかけて、蘇峰とともに各国の新聞事業の視察に出る。一九三五年

に日銀総裁に就任。パリ講和会議、ワシントン軍縮会議、ロンドン国際經濟會議に全權または全權隨員として列席。

\*昭和二十年九月一日付

〔前略〕今日の事態に立ち到りたる主たる原因は、総合的指導の方向に錯誤ありたるか、然らざれば政策又は作戦の遂行上欠漏ありたるかの二途外に出で得ざることは論議の余地なきやう被存候。私は日支事件の拡大に伴い日独接近の趣向出現せし頃より、対米英戦争の見透しに關し、種々の見地より具体的条件に即して当局の所信を質したること幾回なりしやを知らず。然るに只の一度も彼我の力の測定に基く實際的確信を聞くことを得ず。只靈感的信仰と情勢好転の期待とを以て煙幕を張り、万全を期するは不可能なりとして暗中飛躍に邁進せんとするのみ、甚だ心細きを感じ候。〔中略〕尊台に於かせられては、大処高処の御見地を以て國論を鼓吹せられ、其の御意見にして全面的総合的に採択実行せられしならば或は結果を異にしたるやも知れず、忠誠の信念に立脚せる御言動に付懺悔、自責等のあるべき理由は毫も之あるまじく候。言論界より御退陣にも及ばざる義と被存候へども、それは暫く措き、御主張のありし所を充分に宣明せられ候は天下の爲めに有益なる痛快事と存じ候。

与謝野 晶子（一八七八―一九四二 明治十一―昭和十七）大阪府堺市生まれ。女流初の歌集「みだれ髪」は鮮烈。夫は鉄幹。展示書簡。蘇峰の古稀の祝歌を晶子が贈る。初展示。

## 壽詞

与謝野晶子歌

山本直恵作曲

大地の上に降り来て 文章星の在すかな。  
三代の帝と國民に報ゆる心澄み徹る、  
時代の先駆、蘇峰先生。

明健の想まどかにて、暢達の筆はなやげり。  
常に四方を警めて 假りの一語も生氣あり。

天下の恩師、蘇峰先生。

當世の韓蘇、大史公、奇しき力を身に兼ねて、  
七十路經たる来し方も 千とせの業を立てましぬ。  
老いざる巨人、蘇峰先生。

壽をたてまつる、先生は、とこしへ若くおはしませ。  
豊かに高きその史筆、明治の篇を結びませ。  
燦たる光、蘇峰先生。

斎藤 茂吉（一八八二―一九五三 明治十五―昭和二十八）山形県生まれ。医師、歌人。正岡子規、伊藤左千夫に師事。「アララギ」の中心的な同人。独自の写生論を形成し、重厚なりアリズムは芥川龍之介らの賛辞を得た。生家である守谷家は蚕種業も営む上層農家で、家族間には信仰心が篤かった。明治二十九年、上京して親戚の斎藤紀一家に寄寓。二十八年、斎藤家に入籍、東大医科大学に進む。養父創設の青山脳病院が完成し、明治四十年、赤坂区青山南町の新病院に移り住む。大正三年、斎藤紀一の次女と結婚。大正十年、ウイーン及びミュンヘンへ留学。帰国直前の大正十四年、脳病院全焼。再建後の昭和二年、青山脳病院長。蘇峰宛書簡の茂吉の字は味わい深く、哲学的である。

展示書簡 大正十五年五月八日付 青山脳病院内 斎藤茂吉拝

中本 たか子（一九〇三―一九九一 明治三十六―平成三）山口県生まれ。小説家。本名タカ子。大正十年から数年間、県下の小学校勤務。昭和二年、友人と共に上京し働きながら文学・哲学を学ぶ。四年、「女人芸術」に処女短編「赤」を発表。やがてプロレタリア文学に接近し、左翼イデオロギーを盛りこんだ短編数編を発表。東洋モスリン亀戸工場の争議に女工のオルグとして活動中檢舉され、拷問。六年、病氣の為保釈。戦後この経験「赤いダリア」など自伝的作品に描く。七年から地下へ潜入し活動、再び檢舉。懲役四年の判決（治安維持法違反）。十一年出所。「南部鉄瓶工」（十三年四月 新潮社）は転向後の作品。蘇峰宛の書簡は十三年四月四日

付けで、「南部鉄瓶工」を差上げましたが、お暇の節に御高覧下さいませやう伏してお願ひ申し上げます。未だ名もない若輩でございます。不躰にこんなことを致しますのは……日本女性のために御努力下さいませ先生に是非御引立を頂きたく存じますので。先日東日紙上に於て、先生がパール・バック夫人の「大地」に就いての御高評を拝見し、……私などまるで問題になるものではございませんが、識見高き先生の御叱正を頂きたく存じます。」と書いている。「南部鉄瓶工」は代表作であるが、戦時下国策文学の一種としての生産文学とよばれている。書簡の中にも、「今や国家多難の際、生産力拡充はいやが上にも必要な時「南部鉄瓶工」に示された生産統合の持つ社会的意義は重且大なるものと存じます」とある。十六年、プロレタリア文学運動の指導者蔵原惟人と結婚。長編小説「滑走路」は、昭和三十年の砂川闘争の全容を各人物の行動を追求することによって描いた作品。昭和六十一年発行の「広島へ……そしてヒロシマへ」（私の戦後平和運動史）は、八十三歳の中本たか子が、広島市の被爆者の哀しみを優しく静かにみつめている。

展示書簡 昭和十三年四月四日付 ペン書 便箋三枚

高群 逸枝（一八九四～一九六四 明治二十七～昭和三十九）熊本県生まれ。詩人、評論家、女性史研究者。本名橋本イツエ。詩人、婦人運動家としての前半生と、純粹な学者としての後半生の鋭い対照は、童女のような純粹な感性と知的探究心の共存を示している。同人誌を通じ橋本憲三と知り合い、二十五歳で結婚。翌年上京。昭和五年、平塚らいてうらと無産婦人芸術連盟を結成。「婦人戦線」を刊行するが、経営不振で翌年廃刊。その後、宿願であった日本女性史の研究に入る。夫の協力大であった。世俗との交渉を断ち、終生研究生活を続けた。「母系制の研究」（昭和十三年）、「招婿婚の研究」（昭和二十八年）はいずれも前人未踏の業績。「女性の歴史」四卷（昭和三十三年）は、通史として最初の本格的な女性史である。

展示書簡 昭和十八年十一月十五日付 墨書 巻紙

相馬 黒光（一八七六～一九五五 明治九～昭和三十）宮城県生まれ。随筆家。本名良。旧姓星。相馬愛蔵と結婚、中村屋を創業。サロンを開き、

彫刻家萩原守衛・画家中村彝ら<sup>2</sup>を援助、ロシアの亡命者エロシエンコやインドの志士ラス・ビハリ・ボースを保護した。

黒光の生涯の軌跡を辿ると、鋭気と情熱、先見性と信念の強さ、そして信仰心、これらが人生を押しすすめている。黒光は、仙台藩の没落士族の三女として生まれた。父方の多田家は一族揃ってギリシヤ教など旧教の信者であった。異教禁制の時代に何故と思ふ黒光自身も十四歳の時、母と祖母と共に押川方義の仙台基督教教会で受洗している。東北学院神学部第一回卒業生で、後に日本力行会を創設した島貫兵太夫は、少女時代の黒光を「アンビシヤス・ガール」と呼んだ。「大志を抱く少女」、これ程ふさわしい呼び方はない。いつも炎のような情熱で文学と宗教に思いを寄せていた若き黒光。信州穂高村の旧家相馬家へ嫁ぐが、やがて単調な生活ゆえの焦燥感。はげ口で書いた小説は時折「女学雑誌」に掲載された。「黒光」のペンネームは、この頃用いるようになった。余りにもキラキラしたものであるので、黒で包むという意味で巖本善治が命名した。しかしキラキラとした輝きは終生消えることはなかった。才気あふれる女性黒光が駆け抜けた七十九年の生涯は、たくさんの人たちとの出会いと別れであった。「中村屋サロン」に集まった人々は黒光の芸術への深い理解や、強い信念に魅かれ、励まされ、作品を残し歴史をつくった。この黒光の自由な精神は時代を恐れない一族の強い信仰心を受け継いだものに他ならない。それは叔母である佐々城豊寿も同じであった。

展示書簡 昭和二十七年十一月二十五日付  
内容要約

故ビハリ・ボースの日本亡命記をアリのママに書き残したい。私人に残されたので考慮の末、長男安男に手伝わせどうやらまとまりそうに見える通しがつきました。それにつき、ボースの想い出を先生より伺いたい。

## 蘇峰堂便り

とかく梅の季節ばかり注目されるが、記念館にいと、忘れられがちな四季の移ろいを身をもって感じる事が出来る。花の散った四月の梅の枝には、小さな梅の実が沢山ついて、あたかも緑の涙がこぼれ落ちるかのようである。六月に入ると、門から記念館までの通路の紫陽花が、雨の中うす紫のボンボリのように輝き出す。夏草の茂った庭で、昼にはジャンプを競う虫達は、夜には涼しげな声で鳴く。九月のある日、突然香り出す銀木犀の大木、見上げると銀色の小さな花が泡雪のようだ。秋、蘇峰堂入り口の二本の銀杏の木は、ろうそくの炎が燃え上がったような鮮やかな黄色に染まる。

季節は断えることなく巡り、時間は流れて、記念館は、開館から三十二年目に入った。記念館内の見えない時間の針は、明治を指すこともあり、一気に昭和まで進んだりもする。徳富蘇峰という人物を支点にして、針の指す時に身をおく楽しさは一言では表現できない。私の心の中で時計は、カチカチと今日も元気に動いている。

宮崎松代

“Simple is the Best”という言葉を最後に残したアインシュタイン。科学者として客観的に人生を観たとき確信を得た言葉なのだろう。蘇峰は「待五百年之後」という言葉を墓標に刻んだ。歴史家としての蘇峰の眼が、深く静かに人生をみつめている。人はそれぞれ時代背景や生き方を通して真理に近づく。

若き頃に、勝海舟から学んだ「自分の信じるところに従って生きればいつか必ずわかかって貰える」という人間学と、「信念をもって真理にむかえ」という新島襄の教えは、蘇峰の精神形成の中心になっていたのである。「待五百年之後」は二人の恩人への返答であったのではないか。

蘇峰の九十五年間の生涯は決して静かではなかった。その三分の二の人生は、昨年、一昨年の特別展「蘇峰とその時代展・明治編」「大正編」でみてきた。今年の「昭和編」で最後の三分の一の人生をみる。日中戦争から敗戦までを挟んだ激動の時代である。「皇室は日本の一大求心力」とい

う明治の思想をもった蘇峰が、「主権在民」を大原則とする日本国憲法のもとでどのような思いで晩年を過ごしたのか。展示した揮毫や草稿、達磨画の中にその思いをみてみたい。

果たして私自身、人生の最後にもつける言葉は何だろうかと思う。

和田千枝

## 編集後記

記念館は、今年で開館三十二年目に入りました。平成十一年には、渡辺靖氏・平成十二年には小坂善太郎氏の両評議員が亡くなりました。記念館運営に対していただきましたご協力に心から感謝すると共に、ご冥福をお祈り致します。

記念館は、韓国、徳島、大分、熊本、仙台、名古屋など、遠くからの史料閲覧の方々も増え、出会いを楽しませていただいています。平成二年の「昭和書簡展」、平成九年の「達磨画と書簡による戦後の蘇峰展」では、書簡や書類、蘇峰の気持を吐露した「意見書」「言志」「達磨画」などを展示しました。今年平成十三年の昭和展は、書簡が語る「大東亜戦争」を試みましたが、なかなか難しい作業でした。「徳富蘇峰宛書簡目録」の詳細目録を作成しながら、追々解ってくる問題だと思えます。

研究者の方々の研究成果が本になり、御恵贈下さることが多く、喜んでいます。リファレンスの場所を広くして、見ていただいています。また来館者の「父親」や「祖父」の手紙を「書簡目録」でみつけ、閲覧して、感激されておられる方が何人もあり、きつと温かい御家族であったのだと、こちらまで和やかな気持ちになる時もある記念館です。

昨年四月に創刊された総合雑誌季刊「環」（藤原書店）に徳富蘇峰宛書簡の紹介を連載しています。「後藤新平」「釈宗演と鈴木大拙」を書きました。形にすることが大切だとおっしゃる伊藤隆先生の忠告を守り、書いています。

今年の展示の文化人のコーナーは宮崎松代・和田千枝が担当しました。月・水・金は開館しておりますので、ご来館をお待ちしています。

(高野静子)

# 出版案内

財団法人 徳富蘇峰記念塩崎財団所蔵

『徳富蘇峰宛書簡目録』

財団法人 徳富蘇峰記念塩崎財団編

平成 7 月 3 月 発行

出版者 竹越 起一

B 5 判 420 頁 定価 10,000 円 (学生、修士・博士過程の方は 2 割引)  
(送料別)

蘇峰宛の約46,000通の書簡を全て差出人名、社名別に収録した目録。差出人は12,000余人を数える。明治・大正・昭和のオピニオンリーダーをはじめ、政治家から文学者と広い分野の人々との交遊の様子を書簡が伝えている。蘇峰という一人の人物が12,000余人からの書簡を受けている事実と、その人々の職業の多様さに驚かされる。各界の著名人はもとより、多数の市井の人々や冒険家、探検家、暗殺者、謀報員、世に言う奇人変人と、さながら人生の縮図を見るようである。『書簡目録』は人名辞書のようなものであるが、人間に興味のある方々に見ていただきたい。全てが蘇峰宛であるということで一つの物語になる。

## 申し込み方法

直接電話、葉書、FAX、E-mailで当記念館へご注文ください。

〒259-0123 神奈川県中郡二宮町二宮605

とく とみ そ ほう  
**徳 富 蘇 峰 記 念 館**

電話 0463-71-0266

FAX 0463-71-0677

E-mail tsoho@peach.ocn.ne.jp

平成十三年四月一日発行

編集 高野 静子

発行者 竹越 起一

発行所 (財)徳富蘇峰記念塩崎財団

〒259-0123 神奈川県中郡二宮町二宮605

TEL 0463-71-0266

FAX 0463-71-0677

ホームページ

<http://www2.ocn.ne.jp/~tsoho/>

E-mail: [tsoho@peach.ocn.ne.jp](mailto:tsoho@peach.ocn.ne.jp)